

2021年7月野菜概況

北日本は気温高で少雨、北日本・東日本日本海側は多照。東日本太平洋側は降水量が多かった。

九州南部では9～10日にかけて記録的な大雨が降り住宅浸水や圃場灌水に見舞われたが、11日には平年より早い梅雨明けとなった。関東でも上旬は曇雨天の日が多く、葉物野菜を中心に生育や収穫の遅延が出始めた。16日には関東でも平年より3日早い梅雨明けとなり、以降は全国的に晴天・高気温の日が多かった。7月の野菜総入荷量は121,426t(前年比106%)で平年並み、価格230円(75%)は平年の1割安。金額は27,966百万円(80%)で平年を1割近く下回った。

だいこんは青森・北海道産が概ね順調出荷となるも、下旬は各地で高温・干ばつによる品質低下が散見された。消費地も高温のため需要低く相場は安値圏にて保合い推移。総入荷量は平年より1割少なく、価格90円(75%)は平年より1割安。にんじんは北海道産が順調出荷となり、中旬に早場産地が終了するも下旬には後続産地が増量。青森産も月を通して順調出荷となり全体量は充分。北海道産は高温・干ばつの影響から細物傾向となった。総入荷量は平年並み、価格105円(39%)は高値だった前年の半値以下で平年比でも3割安。

はくさいは長野産が出荷調整や雨続きと高気温による圃場ロスから数量は多くなかったが、需要面でも停滞しており安値基調。総入荷量は平年並み、価格59円(60%)は平年より1割以上安い。キャベツは群馬産が生育順調で日々増量し中旬には出荷盛期となる。数量充分で荷動き緩慢なことから安値基調。総入荷量は平年よりやや多く、価格71円(72%)は平年の1割安。ほうれんそうは群馬・茨城産を中心に上旬から雨続きの影響で減少して引合いが強まった。中下旬も数量少なめで相場は堅調推移も例年通りの流れから、総入荷量は平年よりやや多く、価格560円(78%)は平年の1割安。ねぎは茨城・千葉産が雨続きで減少して高値推移。中旬からは降雨や高温の影響で品質低下が目立ち引合いが弱まった。また、北海道産がスタートし東北産とともに漸増となった。総入荷量は平年並み、価格316円(61%)は平年より2割近く安い。レタスは長野産にて潤沢だった前月に続き出荷調整がなされる中、月前半は雨続きと高気温とで圃場ロスが発生。後半は高温と干ばつで数量が前月より落ち着き、相場は緩やかに上昇した。総入荷量は平年よりわずかに少なく、価格105円(70%)は平年よりやや安い。

きゅうりは関東産が終盤となり減少傾向に。中旬は全体量多くなく相場底上げとなったが、下旬は東北産がピークを迎える中で相場は下落傾向となった。総入荷量は平年より2割近く多く、価格202円(53%)は平年より4割近く安い。なす類は上旬が曇雨天続きで関東産の伸び悩みが懸念されたが気温が高いことから順調に増加。総入荷量は平年より1割近く多く、価格286円(62%)は平年の2割安。トマトは前月後半は熊本産の減少で堅調相場となったが、7月は関東産の冬春作の残量がある中で北海道・東北産が増量。前月の高値を引き摺り荷動き鈍く相場下落が続いた。総入荷量は平年並み、価格321円(88%)は平年並み。ピーマンは茨城産の春作が切り上がりに向け減少する中、岩手産が増量。中旬からは全体量多く荷動き鈍化。総入荷量は平年より1割以上多く、価格349円(57%)は平年より2割以上安い。

ばれいしょ類は静岡産を中心に順調出荷が続いた。中旬に北海道産がスタートし、下旬は静岡産が終盤で減少した。時期的に需要は低く月を通して安値基調。総入荷量は平年よりわずかに少なく、価格139円(41%)は平年の2割安。たまねぎは兵庫・佐賀産中心の出回りで佐賀産は月末に終了。月前半は引合いに対して不足する場面あるも後半は引合い弱まる。大玉傾向のため小玉の引合いは強かった。総入荷量は平年よりやや多く、価格117円(85%)は平年並み。

【輸入野菜】ごぼうは2020年秋作が作柄良好だったため中国・台湾産を中心に前年より大幅増。ばれいしょは前年に米
国産が港湾作業の停滞等で少なかったことから前年比で増。一方、にんじんとキャベツはコロナ禍で外食需要が減退す
る中で国産が安値だったことから、中国産を中心に前年比で大幅減。ねぎもコロナ禍での外食需要の減退や港湾作業
の停滞、中国産の作付減により前年比大幅減。